

令和 4 年 5 月 29 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18H03069

研究課題名(和文)「卓越したケアの伝播/継承を可能にする事例研究」の方法の確立

研究課題名(英文) A case study research method for developing knowledge of expert care practices

研究代表者

山本 則子 (Yamamoto-Mitani, Noriko)

東京大学・大学院医学系研究科(医学部)・教授

研究者番号：90280924

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,300,000円

研究成果の概要(和文)：ケアの実践知を共有可能にする「ケアの意味をみつめる事例研究」方法を開発した。研究手順は意識化・言語化、メタファー化、ナラティブ化の3段階にまとめた。実践の意味とコツという2つの抽象度に事例をまとめ、実践の意味ごとにナラティブを付して読者が追体験しやすい形で論文化する。事例論文を読み実践を追体験した読者は、触発され、間主観的な理解と自経験との類似性を手掛かりに、自経験を再構築し新たな意味パースペクティブを得る。そのような再構築が広く起こることでケアの知が普遍化される。「ケアの意味をみつめる事例研究」は、既存の質的研究に立脚しつつも、徒弟制的でないケアのアートの共有を可能とする新規性を持つ。

研究成果の学術的意義や社会的意義

優れた看護ケア実践の暗黙知を共有・伝播可能な形にすることで、看護の質の向上・標準化に役立つ看護学の学術が前進できる。従来の事例研究は淡々とした事例の記述が特徴で、ケアの本質的な意味やコツが明らかでなくケアの知を共有する上では限界があった。我々は既存の質的研究方法に立脚しつつ、看護ケアの知を共有する目的に特化した新たな事例研究方法の開発を進め、実践者が自験例からの学びを広く共有・伝播可能な方法を作っている。何らかのケアを受けつつ長い人生を生きる人々が多くなった現代社会に、ケアの暗黙知の共有・伝播を可能にする本研究は、広く国民が優れたケアを享受できる社会を作るうえで意義あるものである。

研究成果の概要(英文)：We have developed a "Case Study on the Meaning of Care" method that enables sharing of practical knowledge of care. The research procedure was summarized in three stages: becoming aware and articulation, metaphorization, and narrativization. A case is analyzed into two levels of abstraction: the meaning and the tips of the practice. Each meaning is accompanied by narratives. They are converted into a paper in a form that is easy for the reader to relive the narrated practice. Readers who read the case study paper relive the practice and are inspired to reconstruct their own experiences and to gain new meaning perspectives, based on their intersubjective understanding of the case and similarities of the case to their own experience. The large occurrence of such reconstructions universalizes the knowledge of care. The "Case Study on the Meaning of Care" is based on existing qualitative research, but has the novelty of enabling the sharing of the art of care without an apprenticeship.

研究分野：看護学

キーワード：事例研究 実践知 暗黙知 ケア 看護 意味 アート

1. 研究開始当初の背景

看護ケアなどの対人援助実践は「サイエンスでありアートでもある」と言われ、このうちサイエンスは実証研究の蓄積により理論知として共有可能になるがアートの部分は個人知・暗黙知で共有不可能と目されてきた。この部分は実践知(フロネーシス)とも呼ばれてきた。実証主義の考え方のもとで部分(要素)に切り分けざるを得ない「知」の形態では捉えきれない看護・ケアのアートは、それがなければ看護・ケアの実践が成り立たないほどの大きな部分を占めており、この部分を習得できなければ看護・ケアを実践することができない。

従来、フロネーシスは言語化・理論化の不可能な知であり、そのフロネーシスを持つ人の実践を見て自分でやってみることでしか伝えることができないと言われてきた。徒弟制度的に、優れた実践者のそばで見よう見まねでやってみることが求められた。しかし、この看護・ケアの実践知を、なんとか伝播・共有して、みんなで優れた実践ができるようになりたいと考えた。徒弟制度的にその場にいる人だけが学べる看護・ケアの「知」のかたちのままでは看護学は学術とは呼べない、学術的に適切と考えられる研究方法を用いて、地球の裏側にいる人にも、あるいは300年後の看護師にも、今ここで行われている実践について確かな学びを提供できるようなメカニズムを作れてこそ看護学の学術だという考えだった。

看護学、人類学、教育学、哲学といった学術領域では、定性的研究の長い歴史がある。また、看護・ケアの実践現場においては、実践者の学びの一形態として事例研究が使われてきた。これは、人間の諸経験のうちのアートの領域を探求する試みと思われる。しかし、定性的研究の多くは看護・ケアのわざの文脈性、全体性をある程度犠牲にせざるを得ず、ケア実践に関する事例研究は学術的アプローチとして洗練が不十分である上、読者の準備性に左右される部分が大きく実践知の共有伝播には限界がある現状である。

2. 研究の目的

このような経緯を踏まえ、共有・伝播可能なケア実践の知を創出することを目的とした「ケアの意味をみつめる事例研究」方法の開発を目的として、実際にケアの事例研究に取り組みながら研究方法として概念・枠組み化した。現場の実践者に使いやすい可能な限りシンプルな研究方法とすること、一方で、実践知とその共有・伝播に関する学術的な背景を可能な限り検討して、ケアについての学術活動として位置付けうる方法論として確立することを目指した。

今回の取り組みを進めるうちに、このような事例研究に関しては現場の実践者を支援する力があることがわかり、実践者を支援するための方法としての位置づけもできることが明らかになってきた。こちらについても多様な取り組みを試み報告した。

3. 研究の方法

今回は、実際に事例研究方法を使いながら、そこでの学びを研究方法として概念化・枠組み化に役立てるという方法を用いた。「ケアの意味をみつめる事例研究」のアウトラインを作成し、それを現場の方々で共有し、それを手掛かりに事例研究を実際に行い、そのような事例研究の経験の中での学びを再び研究方法にフィードバックしていった。研究方法の共有と新たな事例研究の取り組みをリクルートするため、研究方法の公開ワークショップを年2回(2020年度はCOVID-19禍により1回休止)行った。ワークショップは対面で行ってきたが、COVID-19発生後はオンラインワークショップを新たに構成して実施した。

事例研究を希望する実践者とともに、公開の分析会を月に1回ずつ開催した。実践者には研究分担者数名が分析に伴走し、分析を進めた。このほか、病院の看護師研修の一部として事例研究を行う、月例カンファレンスに事例研究の一部を活用するとりくみなどの依頼があり、研究方法開発の一環として参加した。

実践知の共有・伝播に関する文献検討は継続的に週に1回の読書会を行い、そこでの学びを研究方法の概念化・枠組み化に組み入れた。哲学(現象学)、臨床心理学、教育学、人類学等の書籍を中心に検討し、著者を招いての講演会等も開催した。

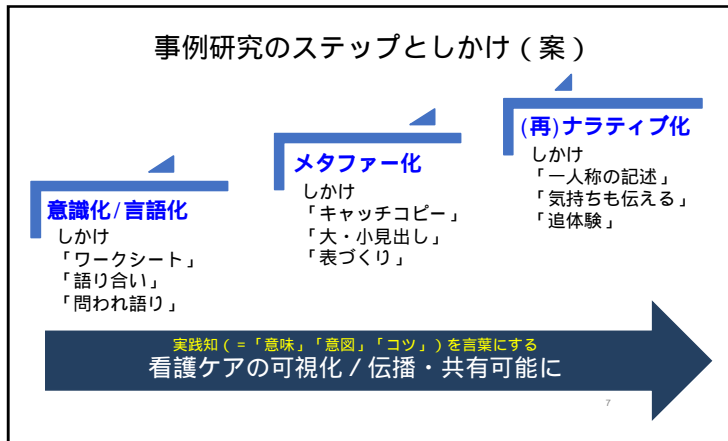
さらに、「ケアの意味をみつめる事例研究」のプロセス中「問われ語り」の効果的な進め方についての問い合わせが多かったため、事例研究を進める際のファシリテーターガイドを作成した。これは、実際に実施した「問われ語り」を録音しデータ化して定性的に分析することで実施した。

4. 研究成果

4年間にワークショップ7回、事例検討会、読書会、講演会を行い、事例研究やそれに関連する活動に関する学会発表、看護学研究関連ジャーナルの特集(2回)、事例研究に関する招待講演等を実施した(業績リスト参照)。事例研究の学会発表は数多く行われ、事例研究論文4件を発表した。

(1)「ケアの意味をみつめる事例研究」の枠組みとプロセス

以上の取り組みを通じて、「ケアの意味をみつめる事例研究」を、図1に示す3ステップから成る研究方法として枠組み化した。



意識化・言語化できないエキスパートの実践に潜む実践知をなんとか捕捉可能にするための、複数のメンバー間での「問われ語り」から生じる間主観的な経験の共有と理解、「メタファー(比喩)」の使用、実践の意図とコツに焦点をあてるための「見出し」の作成、「見出し」によって統制された実践の再ナラティブ化を追加し読者の追体験を可能にすること、それらに基づく「触発」により実践知を共有・伝播可

図1

能にする「ケアの意味を見つめる事例研究」の枠組み化が実現した。

研究プロセスは以下のようなものである。まず、実践の経験についてなるべく自由に思い出されることをワークシートに書き出し、検討のための素材にする。このワークシートを共有しつつ、研究メンバーが実践者(著者)にさらに詳細を尋ねる「問われ語り」を持つ。そこでの討議内容はワークシートに書き足す。ワークシート内容をよく読み「これはどんな実践なのか」「この実践のキモは何か」「そのキモを実現するための実践上のコツはなにか」につき、自由にメタファー(比喩;「キャッチコピー」と称す)を考案する。メタファーを参照しつつ「実践の意図(大見出し)」「その実践を可能にするコツ(小見出し)」という2段階の言葉づくりをして、実践の概要を時間に沿い表に整理する。表を見ながら、大見出し(実践の意図)ごとに、実践者(著者)が自分の経験したことを再度ナラティブとして一人称で記述する。このナラティブの執筆には、最初に作ったワークシートの内容を活用する。このような形で、事例研究のプロセスが進むとした。

ただし、「ケアの意味をみつめる事例研究」の手法を、カンファレンスなどで用いている例では、メタファーや見出し、表づくりなどのプロセスを経ない際にも活用可能であること

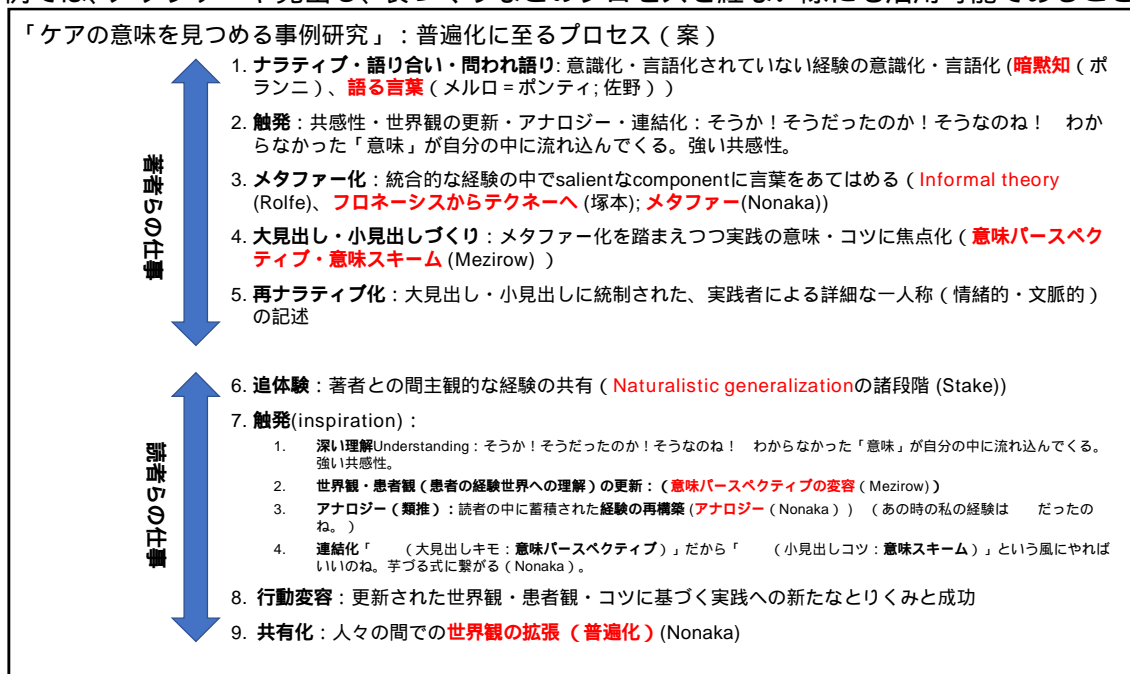


図2

がわかった。この場合も、「ケアの意味をみつめる事例研究」で前提とする失敗ではなく成功に焦点化すること、平等な立場で意見を共有することなどといった要件を用いることで

参加者にとって有意義な事例検討会となることが窺われ、「ポジティブ事例検討会」などといった名称を用いることもあった。

(2) 「ケアの意味をみつめる事例研究」共有・伝播のしくみ

同時に、これらの活動が、実践知(フロネーシス)や学術としての知の開発・共有に関する既存文献の中での議論とどのように対応するかを整理し、「ケアの意味をみつめる事例研究」の学術活動としての位置付けの可能性を検討した(図2)。

「ケアの意味をみつめる事例研究」は、実践知の形式知化に関するこれまでの複数の議論と重複する部分を持つことがわかった。意識化されない知覚としてのケアの実践知の性質は、アリストテレスやメルロ＝ポンティの議論に見ることができた。そのような実践知を意識化・言語化すること、その際にメタファーが活用できる可能性については、メルロ＝ポンティを引用した佐野の議論、野中の SECI モデルなどとの一致を見ることができた。他者の経験や自分の過去の経験を追体験しアナロジーを発見することから生じる触発、それに伴う知覚の更新については、メルロ＝ポンティ、教育学者のステイク、意味パースペクティブの変容に関するメジローの議論などとの重複が見えた。さらに、それらが共有化されることで人々の間で世界観が更新・拡張することについては、野中の共有化の議論、メルロ＝ポンティの側面的普遍といった議論との類似が推察され、「ケアの意味をみつめる事例研究」はこのような普遍化の様式を持つことと整理された。

事例研究の実践を通じ、図2に示したように、普遍性を確保するプロセスは一部読者に依存し、それが達成できるかは個々の読者の準備性によることが分かった。事例の意味が読者に伝わる際には、著者ら、すなわち実践者と共同研究者の間で起こった触発が、著者らと読者の間で起こることが必要であり、その成立は、「読者らの仕事」に左右されるという不確定さを持つことが分かった。

(3) 「ケアの意味をみつめる事例研究」の厳密性評価指標の開発

さらに、学術活動として既存の定量的・定性的研究における厳密性の評価指標を参照し、「ケアの意味をみつめる事例研究」において適切と思われる厳密性の評価指標を開発した(表1)。

表 1

「ケアの意味をみつめる事例研究」の学術性(案)

| 実証主義的研究(定量的研究) | 実証主義に近い定性的研究 (Lincoln & Guba, 1985; 宮田、大久保、吉江、甲斐, 2011) | 構成主義的グラウンデッドセオリー (Charmaz, 2014) | ケアの意味をみつめる事例研究 |
|--|--|---|--|
| 客観性 Objectivity | 確証可能性 Confirmability ・ 監査記録 ・ 監査経過 ・ 研究者・研究参加者の文脈の記述 | 記述なし | ・ 経験は社会的に構成されるという考え方に基盤を置いており、従来と同じ意味の客観性は過ぎない。 ・ クライアント・実践者(著者)の文脈を意識化し記述することで、読者が著者の認識を理解・納得できるようにする(「理解可能性(フオン・ワリクト, 1971)」の確保)。 |
| 再現(可能)性 Reproducibility 信頼性 Reliability | 一貫性 Dependability ・ 信用性の高さ ・ トライアングレーション ・ 段階的複製 ・ データ収集の再現可能性 ・ データ解釈の再現可能性 | 記述なし | ・ データ収集の文脈性・データ解釈の経時的更新性から、従来と同じ意味の再現可能性は過ぎない。 ・ 基本的な事実関係を記録等で確認することは可能。 ・ 複数の研究メンバーによる継続的な検討・合意の手続きで、バランスの取れた解釈を確認することは可能。 |
| 一般化可能性 Generalizability 外的妥当性 External validity | 転用可能性 Transferability ・ 厚い記述 | 有用性 Usefulness ・ 人々の利用できる汎用的なプロセスや暗黙の含意があること、さらなる研究を喚起すること、知識およびより良い世界に貢献できること。 | 触発性(Inspiration) ・ 読者との間主観的な共通理解が生まれ、読者の知覚と理解の更新・拡張が起きる。 ・ 読者の準備性に左右される。 |
| 新規性 Novelty | | 独創性 Originality ・ 新鮮さ、新しい洞察、新しい概念生成、知見の有意義さ、現在のアイデアへの挑戦・拡張・改良 | 触発性(Inspiration) ・ 読者との間主観的な共通理解が生まれ、読者の知覚と理解の更新・拡張が起きる。 ・ 読者の準備性に左右される。 |
| 内的妥当性 Internal validity | 信用性 Credibility 信用性の高い知見が得られる確率を高める積極的な取り組み ・ 同僚との振り返り Peer debriefing ・ 反例分析 Negative case analysis ・ 参照の適切性 Referential adequacy ・ メンバーチェック Member checks | 信用性 Credibility ・ 親しみやすさ、データの十分性、系統的比較、概念の網羅性、論理性、独自評価の根拠 共鳴性 Resonance ・ 描写の充実、当たり前とされていた意味の解明、集団と個人のリンク、意味をなし、より深い洞察に至るか | ・ ケアの意味を問うことができるか。 ・ 対象者にどのような望ましい変化を導出しているか。 ・ 実践の本質的な意味をとらえているかを確認: 大見出し・小見出しは実践を的確に表しているか。経験の記述はリアリティがあり十分か。 ・ 読者の追体験を可能にしているか。 ・ 読者の準備性に左右される。 |

学術活動としての「ケアの意味をみつめる事例研究」は、客観性・再現可能性といった実証主義的な研究の厳密性にはなじまないこと、一般化可能性は上記図2に紹介した普遍化の道筋が該当すること、対人援助活動の実践知としての新規性・信用性について独自の要件が求められることなどをまとめた。

(4) 「問われ語り」を進めるためのファシリテーターガイド

「ケアの意味をみつめる事例研究」について紹介してきた際に、「問われ語り」の効果的な進め方へのガイド(ファシリテーターガイド)の要望が多かったため、実際に行われた「問

われ語り」を録音して定性的に分析した（図3）

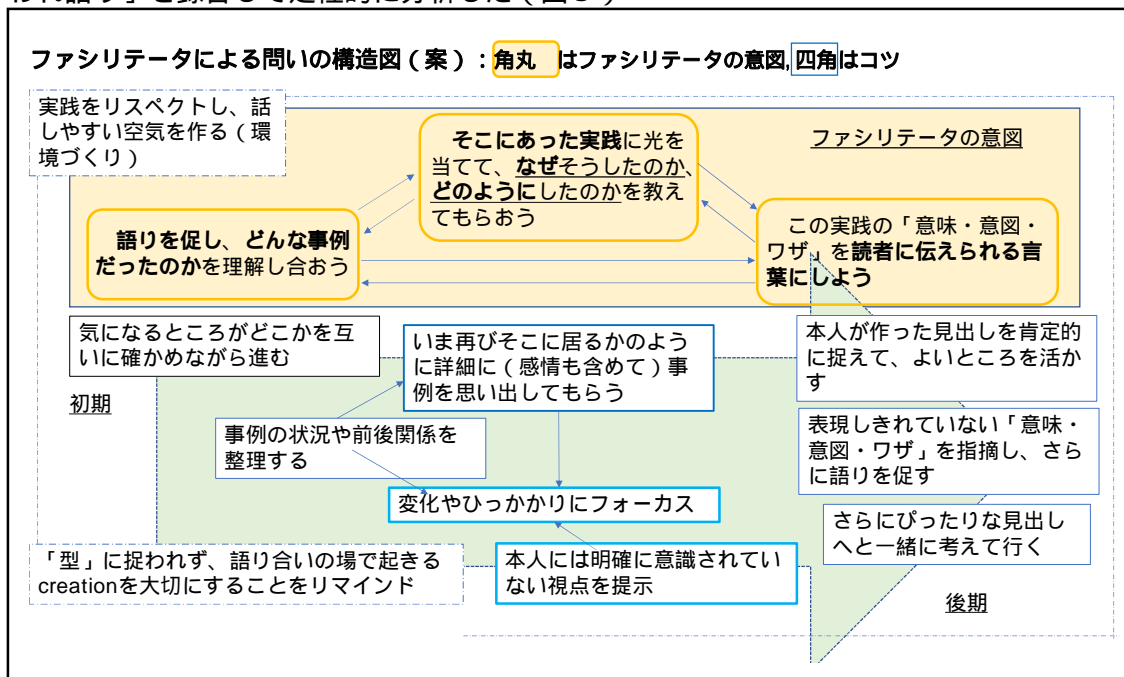


図3

分析の結果、図3に示す分析（「問われ語り」）の構造が明らかになった。「☆語りを促す」は、意識化/言語化に対応し、「☆そこに在った実践に光をあてる」はメタファー化に対応し、「☆この実践の意味・意図・ワザ」は再ナラティブ化に対応して矛盾がなかった。そして、それらを促進する問いかけの方法について、いくつかコツが導き出された「ケアの意味をみつめる事例研究」では、日ごろの多忙な実践活動の中で意識化されていない経験の知覚を丁寧に掘り起こす必要性から、ファシリテーターはまず、自由な振り返りを可能にする実践をリスペクトする話しやすい環境づくりに努める。意識化を促進するため記録物などを手掛かりにしやすい前後関係、事実関係の整理から記憶をたどる。事実関係を語る中で徐々に意識化される経験の詳細をさらに記述共有して、実践者や語り合いのメンバーが追体験できるようにする。その中で、対象者（患者）の変化や、ファシリテーターや語り合いのメンバーが「ひっかかる（自分の理解とは異なることが起きている、自分の経験とは違う、など）」内容にフォーカスし、本人には明確に意識されていない（けれどもそこにあるように思われる）視点を共有してみる。ただし、経験は実践者自身のものであるため、ファシリテーターやメンバーが投げ込んだ視点は実践者自身が吟味し、自分の経験に相応するかを判断するのは実践者自身である。表現しきれない実践の意味や優れた実践の妙をなるべく拾い上げ、語り合って言葉にしてゆく。読者を想定し、以上の経験の共有が読者との間でも可能とするようなぴったりの言葉を探る。以上のような一連の分析プロセスにおいて重要なことは、既存の看護理論、よく用いられるテクニカルタームなどに依存したり捉われたりせず、この語り合いの場で起きる創造を大切にしておくことである。

（5）今後の課題

「ケアの意味をみつめる事例研究」方法は、これまでの検討の成果を今後書籍化し、対人援助実践にかかわる領域の研究者・実践者に広く活用を呼び掛ける予定である。一方、本研究の取り組みの当初は、事例研究論文を積極的に蓄積しそのメタ統合の方法を検討したいと考えていたが、個々の事例研究論文の作成やその際の詳細なプロセスを研究方法としてまとめることに時間がかかり、事例研究のメタ統合の方法まではたどり着くことができなかった。今後さらに検討を進める予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計21件（うち査読付論文 5件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 野口麻衣子、山花令子、山本則子 | 4. 巻 42 |
| 2. 論文標題 「ケアの意味を見つめる事例研究」の老年社会科学への貢献 | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 老年社会科学 | 6. 最初と最後の頁 250-255 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名 山本則子 | 4. 巻 53 |
| 2. 論文標題 看護実践に関する事例研究のための査読基準の提案とその可能性 | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 看護研究 | 6. 最初と最後の頁 304-310 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11477/mf.1681201779 | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名 榊原哲也 | 4. 巻 53 |
| 2. 論文標題 哲学・臨床実践の現象学における査読基準と事例研究 | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 看護研究 | 6. 最初と最後の頁 284-291 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11477/mf.1681201776 | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 山本則子 | 4. 巻 53 |
| 2. 論文標題 看護実践に関する事例研究の査読基準を考える 「ケアの意味をみつめる事例研究」の開発を通して | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 看護研究 | 6. 最初と最後の頁 270-274 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11477/mf.1681201774 | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 望月由紀 | 4. 巻 53 |
| 2. 論文標題 人文・社会科学領域における論文査読基準について | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 看護研究 | 6. 最初と最後の頁 292-297 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11477/mf.1681201777 | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 齋藤 凡 | 4. 巻 53 |
| 2. 論文標題 看護学における事例研究の位置づけの現状と査読基準 | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 看護研究 | 6. 最初と最後の頁 276-282 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11477/mf.1681201775 | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 吉田滋子 | 4. 巻 25 |
| 2. 論文標題 実践者と研究者が共同する事例研究の経験から 実践の妙を伝える科学論文のために | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 家族看護学研究 | 6. 最初と最後の頁 19-22 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 山本則子、野口麻衣子 | 4. 巻 52 |
| 2. 論文標題 「ケアの意味をみつめる事例研究」開発者の視点から | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 看護研究 | 6. 最初と最後の頁 274-275 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11477/mf.1681201643 | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名 佐藤美雪、野口麻衣子、阿部智子、徳江幸代、山本則子. | 4. 巻 7 |
| 2. 論文標題 家族主導で在宅看取りの意思決定が進む中で訪問看護師が行った看取りまでの看護実践：慢性呼吸不全高齢者の在宅看取り事例を通して. | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 日本在宅看護学会誌 | 6. 最初と最後の頁 225-233 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名 山本則子 | 4. 巻 51 |
| 2. 論文標題 「ケアの意味を見つめる事例研究」着想の経緯と概要. 特集 ケアの意味を見つめる事例研究 現場発看護学の構築に向けて. | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 看護研究 | 6. 最初と最後の頁 404-413 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11477/mf.1681201540 | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名 池田真理、野口麻衣子、吉田滋子. | 4. 巻 51 |
| 2. 論文標題 「ケアの意味を見つめる事例研究」のプロセス 実践の文章化 論文化の過程と研究の場づくり. | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 看護研究. | 6. 最初と最後の頁 414-422 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11477/mf.1681201541 | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 野口麻衣子、山本則子. | 4. 巻 51 |
| 2. 論文標題 「大見出し」「小見出し」への整理と学会発表. 特集 ケアの意味を見つめる事例研究 現場発看護学の構築に向けて. | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 看護研究. | 6. 最初と最後の頁 423-430 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11477/mf.1681201542 | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名 野口麻衣子、吉田滋子、山本則子. | 4. 巻 51 |
| 2. 論文標題 論文化の過程と研究の場づくり. 特集 ケアの意味を見つめる事例研究 現場発看護学の構築に向けて. | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 看護研究. | 6. 最初と最後の頁 431-437 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11477/mf.1681201543 | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名 吉田滋子、野口麻衣子、山本則子. | 4. 巻 51 |
| 2. 論文標題 投稿した事例研究論文が得た査読上のポイントと対応. 特集 ケアの意味を見つめる事例研究 現場発看護学の構築に向けて. | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 看護研究. | 6. 最初と最後の頁 438-446 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11477/mf.1681201544 | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名 山花令子、齋藤凡、吉田滋子. | 4. 巻 51 |
| 2. 論文標題 事例研究において考えるべき倫理的配慮. 特集 ケアの意味を見つめる事例研究 現場発看護学の構築に向けて. | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 看護研究. | 6. 最初と最後の頁 447-455 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11477/mf.1681201545 | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名 齋藤凡、山本則子、家高洋、吉田滋子. | 4. 巻 51 |
| 2. 論文標題 「ケアの意味を見つめる事例研究」の学術性. 特集 ケアの意味を見つめる事例研究 現場発看護学の構築に向けて. | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 看護研究. | 6. 最初と最後の頁 456-465 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11477/mf.1681201546 | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名 山本則子、家高洋、吉田滋子. | 4. 巻 51 |
| 2. 論文標題 「ケアの意味を見つめる事例研究」の質評価の視点・特集 ケアの意味を見つめる事例研究 現場発看護学の構築に向けて. | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 看護研究. | 6. 最初と最後の頁 466-471 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11477/mf.1681201547 | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|-----------------|
| 1. 著者名 米村法子、野口麻衣子、二見朝子、山花令子、山本則子 | 4. 巻 27(2) |
| 2. 論文標題 入院を機に難治褥瘡を有する療養者と家族の在宅見取りを実現した看護実践 | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 家族看護学研究 | 6. 最初と最後の頁 - |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-------------------------|
| 1. 著者名 土本千春、野尻清香、柄澤清美、土山和美、白藤恵里子、海藤智美、宇都宮啓子 | 4. 巻 26(2) |
| 2. 論文標題 自分を伝えないAYA世代終末期患者の残された「今」を支えた看護 | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 家族看護学研究 | 6. 最初と最後の頁 188 - 200 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名 柄澤清美 | 4. 巻 41 |
| 2. 論文標題 「一事例研究」が有する看護学への貢献 | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 日本看護科学会誌 | 6. 最初と最後の頁 718-722 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.5630/jans.41.718 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 野尻清香、柄澤清美、柳原清子、津田朗子、斎藤瑠華、海藤智美、土山和美 | 4. 巻 35 |
| 2. 論文標題 緩和ケア病棟における終末期の自覚がない患者の退院支援 | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 日本がん看護学会誌 | 6. 最初と最後の頁 353-359 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.18906/jjscn.35_353_nojiri | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である) | 国際共著 - |

[学会発表] 計17件(うち招待講演 11件/うち国際学会 4件)

| |
|--|
| 1. 発表者名 Yamamoto-Mitani N, Ietaka H, Ikeda M, Noguchi-Watanabe M, Yamahana R. |
| 2. 発表標題 Issue of knowledge sharing in qualitative case studies |
| 3. 学会等名 16th International Congress of Qualitative Inquiry (国際学会) |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 山本沙織、山花令子、野口麻衣子、高橋香織、窪倉正三、湯川多美子、他 |
| 2. 発表標題 告知がされていない同年代の終末期患者に事実を伝えるに至ったプロセスー精神看護専門看護師の役割の検討 |
| 3. 学会等名 第32回サイコオンコロジー学会 |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Yamamoto-Mitani N, Noguchi-Watanabe M, Yamahana R, Yoshida S, Nami Masuda-Saito, Mari Ikeda, Kiyomi Karasawa, Mayuko Tsujimura, Asako Futami, Fumika Horinuki, Hiroshi Ietaka, and Tetsuya Sakakibara. |
| 2. 発表標題 Case Study Research Method to Explore Meaning of Caring Practice: Methodological Development |
| 3. 学会等名 The 7th Global Congress for Qualitative Health Research (国際学会) |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 Yamamoto-Mitani N |
| 2. 発表標題 Scientific Inquiry: Why Qualitative Research Matter |
| 3. 学会等名 The 22nd EAFONS (招待講演) (国際学会) |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 Yamamoto-Mitani |
| 2. 発表標題 Reconsidering the Value of Case Study Research for Nursing |
| 3. 学会等名 The 9th Asia Pacific Enterstomal Therapy Nurse Association Conference (招待講演) (国際学会) |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|-----------------------------|
| 1. 発表者名 山本則子 |
| 2. 発表標題 事例研究論文を書くことについて |
| 3. 学会等名 日本CNS看護学会 (招待講演) |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 野口麻衣子、山本則子、稲垣朝、沼田華子、山田享介 |
| 2. 発表標題 訪問看護事業所における看護実践に焦点を当てたケースカンファレンスの試行と効果 |
| 3. 学会等名 日本在宅看護学会 |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 山本則子 |
| 2. 発表標題 ケアの意味を見つめる事例研究：実践のやりがいや喜びを言語化すること |
| 3. 学会等名 日本助産学会（招待講演） |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|--------------------------------|
| 1. 発表者名 山本則子 |
| 2. 発表標題 ケアの意味を見つめる事例研究の方法開発 |
| 3. 学会等名 日本集中治療医学会（招待講演） |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 山本則子 |
| 2. 発表標題 高齢者の慢性疼痛看護を共有可能な知に：「ケアの意味を見つめる事例研究」の挑戦から |
| 3. 学会等名 日本慢性疼痛学会（招待講演） |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 坂上貴之、鎌倉やよい、増田真也、飛田伊都子、伊藤正人、北岡和代、野村晴夫、山本則子、丹野義彦、岡谷恵子、仲上豪二郎 |
| 2. 発表標題 3つの研究法をめぐる看護科学と心理科学の共同 |
| 3. 学会等名 日本心理学会（招待講演） |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 山本則子 |
| 2. 発表標題 事例研究がもたらす看護実践の知：「ケアの意味を見つめる事例研究」方法開発の取り組みから |
| 3. 学会等名 日本循環器看護学会（招待講演） |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 山本則子 |
| 2. 発表標題 ケアの意味を見つめる事例研究：現場発看護学の構築に向けて |
| 3. 学会等名 日本感染看護学会（招待講演） |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|----------------------------------|
| 1. 発表者名 山本則子 |
| 2. 発表標題 現場から発信する質的研究：事例研究を中心に |
| 3. 学会等名 日本赤十字看護学会（招待講演） |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 山花令子、野口麻衣子、吉田滋子、池田真理、斎藤凡、柄澤清美、山本則子 |
| 2. 発表標題 ケアの意味に焦点化した事例研究セミナーの開発：事例研究実施の動機づけに与える影響の評価 |
| 3. 学会等名 日本家族看護学会 |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 野口麻衣子、岩本大希、姉崎沙緒里、稲垣安沙、山本則子 |
| 2. 発表標題 ケアの質保証・質改善を目指した、ポジティブ・フレームワークを用いた事例検討会の開発と試行 |
| 3. 学会等名 日本在宅看護学会 |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|-------------------------------------|
| 1. 発表者名 山本則子 |
| 2. 発表標題 事例研究とナラティブ：語りが生み出す看護実践の知 |
| 3. 学会等名 日本家族看護学会（招待講演） |
| 4. 発表年 2018年 |

〔図書〕 計1件

| | |
|-----------------------|-----------------|
| 1. 著者名 山崎あけみ、原礼子 | 4. 発行年 2022年 |
| 2. 出版社 南江堂 | 5. 総ページ数 316 |
| 3. 書名 家族看護学（改訂第3版） | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

| |
|---|
| <p>日本の現場発事例研究 http://www.adng.m.u-tokyo.ac.jp/j_201512.html 日本の現場発事例研究 https://tokyocasesstudy.tumblr.com//</p> |
|---|

6. 研究組織

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-------|---|---|----|
| 研究分担者 | 坂本 智代枝 (Sakamoto Chiyoe) (00317645) | 大正大学・社会共生学部・教授 (32635) | |
| 研究分担者 | 宮本 有紀 (Miyamoto Yuki) (10292616) | 東京大学・大学院医学系研究科(医学部)・准教授 (12601) | |
| 研究分担者 | 榊原 哲也 (Sakakibara Tetsuya) (20205727) | 東京女子大学・現代教養学部・教授 (32652) | |
| 研究分担者 | 石原 孝二 (Ishihara Koji) (30291991) | 東京大学・大学院総合文化研究科・教授 (12601) | |
| 研究分担者 | 孫 大輔 (Son Daisuke) (40637039) | 鳥取大学・医学部・プロジェクト研究員 (15101) | |
| 研究分担者 | 山花 令子 (Yamahana Reiko) (40642012) | 東京医療保健大学・看護学部・講師 (32809) | |
| 研究分担者 | 野口 麻衣子 (Noguchi Maiko) (60734530) | 東京医科歯科大学・大学院保健衛生学研究科・准教授 (12602) | |
| 研究分担者 | 望月 由紀 (Mochizuki Yuki) (70400819) | 東都大学・幕張ヒューマンケア学部・准教授 (32428) | |

6. 研究組織（つづき）

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-------|--|--|----|
| 研究分担者 | 家高 洋 (Ietaka Hiroshi) (70456937) | 東北医科薬科大学・教養教育センター・教授 (31305) | |
| 研究分担者 | 池田 真理 (Ikeda Mari) (70610210) | 東京大学・大学院医学系研究科(医学部)・教授 (12601) | |
| 研究分担者 | 齋藤 凡 (Saito Nami) (80710748) | 東京大学・医学部附属病院・看護師 (12601) | |
| 研究分担者 | 柄澤 清美 (Karasawa Kiyomi) (90339945) | 新潟青陵大学・看護学部・教授 (33109) | |
| 研究分担者 | 吉田 滋子 (Yoshida Shigeko) (90565996) | 東京大学・大学院医学系研究科(医学部)・客員研究員 (12601) | |

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-------|--|--|----|
| 連携研究者 | 黒江 ゆり子 (Kuroe Yuriko) (40295712) | 甲南女子大学・看護リハビリテーション学部・教授 (34507) | |

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
| | |

| | | | | |
|----|-----------------|--|--|--|
| 韓国 | Ajou University | | | |
|----|-----------------|--|--|--|